



二 春はあけぼの（大仏の巻 下）

「大丈夫か」

風レンジャーに駆け寄る三体の塔レンジャー。

「ありがとう。お陰で助かった。」

大仏の拍手の波動を受け、片膝を付き、もはや地面に屈服寸前だった風レンジャーが、仲間に肩を貸してもらいながらも立ち上がった。

「これを食べて、元気を出せ」

仲間が差し出したのは、お餅だった。

「これは、コストパフォーマンスが高い、人気の阿闍梨餅じゃないか」

眼が餅と同様に丸くなり、思わず舌なめずりする風レンジャー。お腹もゴロゴロと鳴っている。

「そうだ。力餅だ。これを食べれば、大仏なんてイチコロだ」

仲間から差し出された餅と気持ちの両面からの応援だ。

「もちろんだ。ありがとう」

風レンジャーは、大きく頷くと、袋の片隅の三角の切れ目を目ざとく見つけると、すばやく袋を破り、開けるのももどかしく、お餅をほおぼる。

「うまい。この、中のお餅と餡と生地が絶妙なバランスなんだよなあ。行列ができる理由がわかるよ」

風レンジャーは、食のレポーターのように、一人納得の一人ごちをする。ふと、見渡すと、仲間のレンジャーも同じようにお餅をほおぼっていた。

「おお。これで、パワー全開だ」

仲間のレンジャーとの声がシンクロする。

「ところで、あいつは何者だ」

レンジャーたちはお餅の美味しさに心を奪われていたが、ようやく目の前の敵の存在に気が付いた。

「ああ、あいつか」

どこからか、ペットボトルのお茶を四本調達してきた風レンジャーが、仲間にも手渡ししながら、何事もないかのように答える。

「奈良の大仏らしい。「都を返せ、都を返せ」とほざきながら、観光客たちを攻撃していたので、追い出そうとしたのだが、反対に、やられそうになったのだ。大仏のくせに、人に対するやさしさのかけらもない奴だ。おかげで、俺の体中の瓦が割れて、かけらになりそうだったよ。このままでは許せん」

ようやく、気持ちが、お餅から大仏に移りつつあった。

「くそ。仲間がいたのか。それにしても、戦いの最中なのに、いくら腹が減っては戦はできず、といっても、尊敬すべき大仏である俺を目の前にしながら、餅を喰い、お茶まで飲んで一服するとはふざけるにもほどがある。餅は、まずは、この俺様にお供えすべきだろう。順番が違うだろう。いや、待てよ。これが、こちらを油断させる京の奴らの戦いの仕方かもしれない。口ばっかり上手くて、心裏腹の京都人らしい嫌味なやり方だ。まあ、京の都は、これまでも、何回も、焼き討ちにあってきたから、表面上の取り繕いだけは上手なのだろう。そんな手には、俺は乗らないぞ。手のひらに乗るのはそっちの方だ、ここは、冷静に、冷静に」

目を閉じ、自分自身にゆっくりと語りかけ、内省する大仏。そして、精神を統一させるために、再び、座り込んで、座禅を組んだ。

「なんだ、あいつは。戦いの途中なのに、座り込んで、眼を閉じて閉まったぞ」

「もう、闘う気がないのか」

「いや、俺たちを油断させる気だろう」

「そう言えば、昔、奈良の奴らは、仏に仕える坊主の身なのに、槍や刀を使い、この国の主に、力で無理やり自分たちの要求を通させただろう。奈良の奴らの考えそんなことだ」

塔レンジャーたちが、口々に、奈良の悪口を言うのを黙って聞いていた大仏だが、とうとう、堪忍袋の緒が切れて、癩癩玉が破裂するかのようになり、顔を真っ赤にして立ち上がった。

「お前たちは何者だ」

「おっ、やはりやるその後

気らしい。小細工は効かないことによく気がついたか。この、唐変木じゃなく、唐もどきの大仏め。そんなに俺たちの名前が知りたければ教えてやろう。俺は、大地の化身、地レンジャー」

「同じく、風の化身、風レンジャー」

「同じく、火の化身、火レンジャー」

「そして、最後に、空の化身、空レンジャー」

この後、声が同時に発せられた。

「四人合わせて、京都戦隊塔レンジャーだ。京都の街は、悪の手から、俺たちが守る。お前には指一本、爪の先も触れさせないぞ」

四体の声が和音となって、美しいハーモニーを聞かせてくれた。

「何が塔レンジャーだ。小賢しい。この大仏様がお前たちを倒して、都を取り戻してやる」

それから、大仏と塔レンジャーたちの壮絶な戦いが繰り広げられた。だが、一進一退の攻防で、どちらが優勢とも劣勢とも判断し兼ねた。まさに、五分五分だ、

「ごーごーごー」

「ぶーぶーぶー」

激しい息遣いと喉の鳴る音が京の街にこだました。互いに疲れ果てて、勝負がつかないのだ。

戦いは一週間続けられた。

そのうちに、桜の花は散って、木からは緑の葉が芽吹き始めた。当初は、京都戦隊塔レンジャーを応援し、奈良の大仏に野次を飛ばしていた人々も、桜の花びらが一枚、一枚と木の枝から離れるように、戦いの観戦場から、一人、また、一人と、去っていった。

そして、とうとう最後の一人さえもいなくなり、そこには、塔レンジャー四体と大仏一体だけになってしまった。周りを見回す塔レンジャーたちと大仏。観戦者がいなくなると、急に、戦う気持ちも失せていった。

「今日は、この辺で勘弁してやる。だが、再び、都は奈良に戻すからな」と大仏は捨て台詞を残すと、「うむ」と大声を上げた。

先ほどまでの巨大な体は、修学旅行生がお土産に買うような小さな飾り物の小仏に変身すると、笹船に乗って、鴨川を下って行った。こうして、京都戦隊塔レンジャーたちの活躍のお陰で、京都の街は、都は守られたのだった。だが、人々や観光客などは、そんなことはお構いなしに、普段の生活に戻っていた。